直江兼続公ゆかりの地

日本三文殊 亀岡文殊堂

『亀岡百首』パネル展資料

（直江兼続公等亀岡文殊堂奉納詩歌百首）

一般社団法人　**高畠町観光協会作成**

高畠町大字山崎200-1 電話　0238-57-3844

この資料は、高畠町郷土資料館が、資料館開館 20 周年記念事業として、特別展『出羽亀岡文殊堂』を開催時作成した資料より抜粋し掲載させて頂いております。

☆尚、資料原本をお求めになりたい方は、高畠町役場文化室（電話0238(52)4523)にて300円で販売しています。

亀岡文殊堂奉納詩歌百首

慶長6年（一六〇一）8月、関ヶ原合戦の後、会津１２０万石から米沢30万石へ削封された上杉景勝の重臣として執政にあたった直江山城守兼続は翌7年2月27日、雅友20余人と共に亀岡文殊堂に詣で、詩歌の席を設けた。何故の「余裕」（高畠町史）か知るべくもないが、現在、その原短冊「文殊堂奉納詩歌百首」（以下「亀岡百首」）が大聖寺に残されている。

亀岡百首の読み下し、解釈、解説等は※1東置賜郡史（以下郡史）※2高畠町史（町史）外に多く見られるが、ここでは※3山形県立米沢女子短期大学遠藤綺一郎教授のご研究（遠藤氏本）に多くを拠らせていただいた。

※1「東置賜郡史」　手塚富五郎編著　昭和14年　東置賜郡教育会

2「高畠町史中巻」　佐藤東一主筆　昭和51年　高畠町役場

3「亀岡文殊奉納詩歌百首について」昭和63年県立米沢女子短大付属生活文化研究所報告第15号）

・体裁等　木箱入れで、縦約41㎝、横約30㎝、美濃紙の表裏に短冊を5枚（5首）ずつ張り合わせて綴じている。

・構成は先ず序文があり、続いて短冊、奥書となっている。

・和歌の出題は奥書に大國但馬守実頼（直江兼續の実弟）とあるが詩についても筆跡から同一人とみられる。

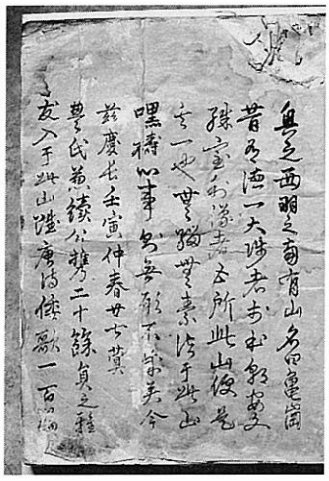
・短冊の上部に、作者初出時にその姓と称号が書かれているが、これは奥書により、寛文8年、法印宥舜の書き入れと知れる。

序

奥之西羽之南有山　名曰亀崗
昔有徳一大師者　於本朝安文
殊室利像者五所　北山便是
其一也　無緇無素詣此山
嘿祷心事則無願不成矣　今
茲慶長壬寅仲春廿七蓂
豊氏兼續公携二十餘員之雅

序

奥の西　羽の南に山あり　名づけて亀岡と曰ふ
昔徳一大師なる者あり　本朝に於いて文
殊室利像を安んずる者五所　此の山は便ち是れ
其の一也　緇と無く素と無く此の山に詣で
心事を黙祷すれば則ち願の成らざる無し　今
茲に慶長壬寅仲春廿七蓂
豊氏兼續公二十余員之雅



亀岡百首序文（前半）

・直江山城守兼続は、慶長3年上杉氏　会津１２０万石移封の折、秀吉の特命大名として長井（置賜）伊達、信夫3郡を支配した文武両道に秀でた英傑であるがここでは多くを語らない。春日右衛門元忠は直江の配下にあり高畑城代の要職にあった。

・詩歌百首の表記は先ず「郡史」によって書き上げ次に「遠藤氏本」と対比し校正した。但し「郡史」には37 47 54 69が欠落していたのでその分は「遠藤氏本」によった。

・作品番号は短冊順で「遠藤氏本」に従った。原書（短冊）は現時点では墨書が薄れ、また全く擦り減って見えず判読不可能なものが多い。その短冊、箇所等について遠藤氏は古い写本等による先人の解読、研究によったと述べておられるが手塚氏も同様の経緯があったと思われる。

・7梅有遅速　原短冊は早くから脱落したと思われ奥書によって寛永5年に法印良永が補ったことが知れる。

・28は欠落したまま補われていない。従って両本共写本によるものと思われる。

・61松雪（兼続）短冊は欠落し、関わりのない別短冊が貼られている。両本には出ているが典拠は不明、但し「米沢鹿子巻二」のうち「直江侍従山城守兼続墓」の項に「元旦、晩鐘、山家、蛍入簾、菊花、松雲、逢恋（以上亀岡百首7首）」（松雪の題が松雲になっている）外3首あり、それぞれ字句、解読に若干の差異がある。

・序（文）の下段　読み下し文は「遠藤氏本」による。

友入干此山　賦唐詩倭歌一百篇
其詩之妙也　其歌奇也裁
錦繡磨金玉寔千年之風致
也　聚作一冊以需予書題辭　揶
揄者數回　雖然厳命不獲已謾
序
前華園泰安玄劉　朱印

友を携えて此の山に入り　唐詩倭歌一百編を賦す
其の詩の妙なるや　其の歌の奇なるや
錦繡を裁ち金玉を磨く　寔に千年の風致
也　聚めて一冊と作し以て予に題辞を書せんことを需む　揶
揄すること数回　然りと雖も厳命已むを獲ず　謾りに
序す
前華園泰安玄劉　朱印

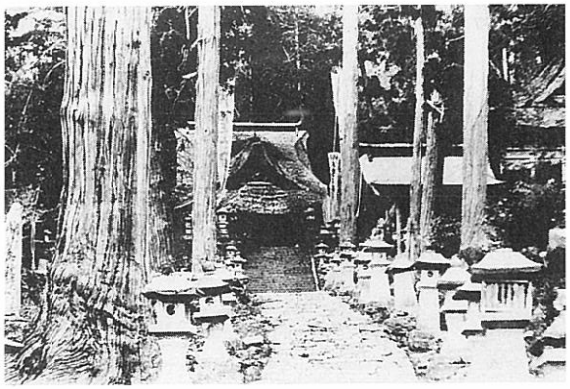
亀岡文殊堂奉納詩歌百首　慶長七壬寅年仲春

1 元日　揚柳其賓花主人　屠蘇擧盃祝元辰　迎新送舊桃符換　万戸千門一様春　直江兼續
2 立春　雪深く降にし里に春立と　あけぼの霞むみ吉野の山　山城守
3 兼待子日　袖はへて引野に松を残しつゝ　また來む　春の子日をそ待つ　左衞門
4 霞隔行舟　烟波渺々日融々　霞隔行舟興已濃　無數歸帆春不見　櫓聲却在夕霏中　倉賀野綱秀
5 雪中鶯　山里の道かすかなる雪の内に　春を知らする鶯の聲　八王寺富降
6 蛙鳴苗代　處々小草花咲く春の日の　苗代水にかはず啼なり　鮎川秀定
7 梅有遲速　我宿の一木の梅も日の移る　南の枝や先つ咲ぬらん　高津秀景
8 獨摘若菜　立寄れは澤邊に移る水影を　友となしつゝ若菜摘なり　潟上秀光
9 行路柳　随風帶兩日顛狂　楊柳枝々行路傍　若是有情應繫別　糸來纔去一春忙　安田能元
10 蕨未遍　旭さす岑のつゝきの雪消て　所々にもゆるさわらび　藏田忠廣
11 歸雁　歸雁聲々只懶聞　月明影落數行群　瀟湘何事背春去　飛入寒天萬里雲　玄劉
12 花未開　新玉の春たつ日より咲ぬやと　待たる々園の花はいつみん　隱共
13 花盛　處々花開烟雨中　遊人携杖惱東風　春來忽以陽和力　開盡枝頭爛漫紅　宇津江朝清
14 欲散花　咲く花もやゝ色深くなりぬれば　空行風の昔もうらめし　宇津江長賢
15 故郷桃花　立歸り又住春の古郷に　桃咲くはかり昔なりけり　朝清
16 松上藤　百尺藤纏万丈松　緑陰深處影猶濃　花開千紫垂纓絡　終伴蒼髯共化龍　千坂長朝
17 折歡冬　一枝は手折てもみん散る花の　春のかたみに残る山吹　岩井信能
18 樵路躑躅　山柴に岩根の躑躅かりこめて　花を木こりのおひ歸る道　元貞
19 杜若寫水　流行く澤邊の水に影見へて　そこにもさける杜若かな　其阿
20 春月　朦朧春月半西残　起捲簾成秋色看　一鏡晴飛出霞後　曉移花影上欄干　前田利貞
21 更衣　九重の花のたもとを一とへには　ぬきかへ難き夏衣かな　吉益家能
22 卯花遶家　白たへの浪やかげ散る玉川の　里のめくりに咲ける卯の花　元貞
23 郭公數聲　蜀魄聲々緑樹濃　遊人一聽涙無從　幾回來上動歸思　臍噬庭前栽箇松　大國實朝
24 馬上聞蟬　暮るゝ日を馬に任せて行山の　空に蟬なく松の下道　来次氏秀
玄劉
春日續忠
出雲
但馬
與十郎
與市
備中
東明寺
慶次
右近

亀岡百首序文（後半）

25 沼菖蒲　あやめもわかぬ露の色哉　富隆
26 五月雨　日數へて降さみたれに小舟さす　迎も遠し里の中川　能元
27 瞿麥　草々の中にもわきて見へぬるは　から紅のなてしこの花　秀光
28 螢入簾　涼螢度竹影横斜　忽入疎簾夜色加　應是客星侵帝坐　丹良一點映窓紗　兼續
29 深更鵜河　ふける夜の月の桂の河岸に　流れて遠き鵜飼火のかけ　万願寺高信仙右衞門
30 照射　夏山の岑のともしの影みれは　夕暗の夜の星や出つらん　實頼
31 百合草　夏草に露もよられてさゆり咲く　すそ野の原の雨の夕くれ　隠其
32 泉為夏栖　せき入し水にや秋の近からし　暮るすみかはなつとしもなし　信能
33 夏月　夏の夜の明やすき月は明残り　捲をましけるこまの外の月　利貞
34 池蓮　吹露池蓮風色加　亭々淨植玉無瑕　一枝出水清香動　本是楊妃解語花　元貞
35 家々夏祓　家々の御祓のぬさもなかれては　同し河瀬の水のしら浪　氏秀
36 風告秋使　短夜の明ぬる程に秋きぬと　しらせて過る風の音哉　楡井綱忠織部
37 七夕　逢七夕龝天未晴　牽牛織女更多情　銀河忽被微雲掩　流水終宵白髪聲　元貞
38 野萩　置余り露やこぼるゝ秋の野の　小萩かうれは吹風もなし　綱秀
39 刈萱亂籬　古郷は籬のうちと刈萱の　亂るゝばかり吹あらしかな　家能
40 女郎花　暮ふかくたてける佐賀野の女郎花　なまめく袖を人なとかめそ　隠其
41 淺茅露重　名にしあふ淺茅か露は淺からで　なひくはかりに見ゆる暮哉　長朝
42 蘭香董枕　暮るゝ野の枕にかほるふちばかま　今年も秋やきてかへるらん　忠廣
43 荻聲驚夢　うたゝねの枕の夢はおぎの葉の　聲より覺て秋はきにけリ　綱秀
44 夜鹿　夜聽鹿鳴頻斷魂　翠微深處數聲喧　呦々呼友麈孤枕　懶似巴山暮雨猿　玄劉
45 雲間雁　曙の空より聲のまつ落て　雲間に見ゆる雁の一つら　忠廣
46 槿花　忽見槿榮秋思加　朝開暮落小籬笆　凄々風露半窓外　纔保紅顔一日花　秀定
47 翫月　秋天雲盡太耐憐　嗒倚欄干月色鮮　三五夜中人不寝　家々酔賞一簾前　秀忠
48 三日月　影は又ほのかに三日の月なから　秋とはしるき光りなりけり　實頼
49 駒迎　望月の影すみのほる相坂の　關路の駒やまつ引ぬらん　其阿
50 九月十三夜　残る夜を思へはいとゝ惜まるゝ　名高き月の明方の空　同
51 搗衣聲幽　天涯行客豈消憂　半夜霜風碪韵幽　閨月明時多搗恨　漢宮遠報一簾秋　朝清
52 虫聲非一　えらびつゝ今宵や野邊の枕せん　こゝらの虫の聲にひかれて　綱忠
53 菊花　菊逢秋日露香奇　白々紅々花滿技　好把西施舊脂粉　淡粧濃抹上東籬　兼續
54 雨後紅葉　停車坐愛夕陽前　紅葉翩々雨後天　樹々半晴如濯錦　呉江秋色自西川　秀定
55 初時雨　昨日今日雲のけしきそ替りける　時雨や冬をさそひきぬらん　秀光
56 落葉　夜臥岩房夢易驚　滿山落葉以秋鳴　辭枝片々随風去　便向林間作雨聲　玄劉
57 枯野　春はもへ秋は花咲く色かへて　かるゝ野中の霜の下草　朝秀
58 寒庭霜　かれ残すゝきをしなみ置霜の　深き朝氣の庭の寒けき　能元

兼續とその雅友が百首を詠じた文殊堂（改築以前・写真大聖寺蔵）



59 閨上霰　閨の戸は跡も枕も風ふれて　霰よこきり夜やふけぬらん　利貞
60 夜千鳥　我か影を妻としたひて終夜　月の入江に千鳥なくなり　長朝
61 松雪　孤松吹雪倚冊岩檐　一夜枝頭白髪添　睡起朝來開箔見　灞橋詩思在蒼髯　兼續
62 濱寒芦　吹通り濱風さへてほのほのと　霜の花ちる芦の一むら　綱忠
63 氷上雪　降ぬれとたまらさりしも汀より　氷れは見ゆる雪の一むら　氏秀
64 月前神樂　萬代は兼て知らるゝ時なれや　月に聲すむ里の夜神樂　元忠
65 暮鷹狩　山陰の暮る片野の鷹人は　かへさもさらに袖の白雪　利貞
66 深山炭竈　住人の有りとも知らぬ奥山に　のぼる烟や炭をやくらん　實頼
67 閑居爐火　閑々寂々飽看巒　爐火煎茶當晚飡　雲自爲庵巖自壁　手燒榾柮忘殘寒　元貞
68 佛名　唱へぬる佛の御名ハ燈の　影ふけつゝも聲そ殘れる　信能
69 除夜　**鳥鐘のこゑきくまでとともす火の　かげにたく香ぞ空にみちぬる**　綱忠
70 未通詞戀　よりそうも又色深き面もちを　いつうち解て事かわさまし　忠廣
71 始曳戀　引みんもさすかなりとは忍ぶ身も　思ひ餘りて送る玉章　其阿
72 逢戀　風花雪月不關情　邂逅相逢慰此生　私語今宵別無事　共修河誓又山盟　兼續
73 後朝戀　掣電合歡終作冤　何圖今夜得君恩　斷腸告別五更後　月白板橋霜一痕　元真
74 未契戀　年少風流甲世間　僉言容皃貴妃顔　蒙塵蜀道當時事　比翼連枝不可攀　宗繁
75 來不留戀　夢にきてうつゝに歸る俤の　残るかひなき閨の内哉　長朝
76 隱在所戀　さよふかく忍ひきぬれば聞馴ぬ　聲打立て其人はなし　家能
77 絶後驚戀　中々に思ひ絶えにしゆう暮を　また驚かす文の傳か那　隱其
78 片思　幾ゆうべわか誠をや閨の戸にたちふかせども人ハつれなき　信能
79 老後戀　思ひ餘りまことならざる夢をさへ　かたり出ぬる老の哀れさ　氏秀
80 待戀　欄干倚遍鬢皤然　有約不來漏刻遷　虛蹬惱人眠不得　風搖松竹一簾前　玄劉
81 軒松　積翠軒松啼子規　牀頭寂々夢醒時　庭前有个萬年樹　夜々風聲侵老涯　朝清
82 庭遣水　苔のむす庭の岩間に流行　水も翠の色やそうらん　忠廣
83 窓前竹　終日口前奈寂寥　自栽修竹樂逍遥　非含西嶺千巒雪　唯慣七賢出晋朝　元貞
84 圍碁　閑邊相對思無邪　終日圍碁夕照斜　一局聲宜竹樓上　夜來幾度落灯花　朝清
85 行客休橋　昔見しながらの里は荒れぬると　橋のほとりに休む旅人　富隆
86 薄暮煙　眞柴たく烟も雲も夕暮の　風のまにまになひく空哉　能元
87 野亭風　まばらなる野邊の庵ハいとゝしく　風の音さへはけしかりけり　秀光
88 海路日暮　烟波月白映斜輝　獨數寒鴉南北磯　嗌到芦花江水上　漁翁繫得釣舟歸　宗繁
89 山家　磐石垂羅避世塵　山中舊宅獨客身　白雲深處行人少　峭壁攢峯蓋四隣　兼續
90 蕭寺　紛々世事未曾聞　寺在林間小路分　門外更無車馬客　晨鐘夕梵出深雲　玄劉
91 曉鐘　支枕幽齊夢不成　疎鐘報曉太多情　豐山霜白一聲裏　月落烏啼三五更　兼續
92 觀無常　鳥邊野や餘所のなかめの夕煙　哀といひし人もいつかは　隱其

亀岡百首 右から部分 左奥書

93 閑中燈　吹風も静にくれて奥山の　庵しらるゝ燈の影　家能
94 往事如夢　こしかたを思ひ出れば行末も　夢の内なる夢の世の中　富隆
95 錢別　折柳橋邊涙幾回　駐鞍終日擧離盃　歸舟早載春宵月　呈我　江南一朶梅　宗繁
96 旅行　露宿風冷征袖霑　千莖白髮萬莖添　出門遥望片雲外　又向誰家借半檐　玄劉
97 夜鶴　ふくる世の松の嵐に夢覺て　きくもわびしき老鶴の声　其阿
98 船過江　吹風も入江の小舟漕ぎきえて　鐘の昔のみ夕波の上　利貞
99 眺望　浮雲も立そう多故　のうら波に　小舟こき行春のあけぼの　長廣
100 瑞籬祝　住吉の松の千とせを幾かへり　君かありつる世にかそへまし　實頼

作詩者　直江山城守兼續　七首　鮎川與五郎秀定　四首　弘徳寺
玄劉和尚　七首　宇津江九右衞門朝清　五首　元貞　七首　宗
繁　三首　凡　三十三首

同　歌　倉加野左衞門次郎綱秀　三首　八王寺民部少輔富隆　五
首　潟上彌太郎秀光　四首　安田上總能元　四首　藏田惣左衞門
忠廣　五首　稱念寺閑居其阿　五首　宇津江藤右衞門長賢　一首
千坂与市長朝　四首　岩井備中信能　四首　若松東明寺阿彌
四首　前田慶次利貞　五首　吉益右近家能　四首　大國但馬守
實頼　五首　來次出雲氏秀　四首　萬願寺仙右衞門高信　一首
春日與十郎續忠　一首　楡井織部綱忠　四首　來次吉三朝秀　一
首　春日右衞門元忠　一首　高津刑部長廣　一首　高津七郎太郎
秀景　一首　凡　六十七首

（奥書）寛永五年　戊辰　伍月廿五　日法印良永
詩歌九拾九枚　仍第七番梅有遅速ノ短尺書副
和歌之出題大國但馬守實頼
頭書称号寛文八戊申霜月廿七日　大聖寺住法印宥舜

※寛永五年（一六二八）　寛文八年（一六六八）

序（文）に「――緇（し）と無く素（そ）と無く此の山（文殊堂）に詣で心事を黙祷すれば則ち願の成らざる無し」云々とある。

緇　とは黒染めの衣服、転じて僧衣、更に僧

素　とは生地のままの白い布、白衣

緇素　といえば、僧と世俗（仏門ではない）の人と一般的に解されている。（現代風に）いうなれば「身分、階層にかかわらず誰でも」ということであろう。